

# 足尾山地ジュラ紀付加体中の砥石型珪質粘土岩

発表者② 生物圏変遷科学分野 岩見崇弘

足尾山地では1970年代に葛生地域においてコノドント化石層序学に基づき岩相層序と地質構造が大幅に見直され、衝上断層により一部の地層が繰り返す覆瓦構造が報告された(例えば小池ほか1971; 柳本1973)。その後、放散虫化石層序学の発展によってこの地域の地質構造の概略が明らかになった(例えばSashida et al., 1982; Aono, 1985)。Kamata(1996)は足尾地域の広範囲にわたる地層を詳細に検討し、ジュラ紀付加体堆積物の岩相組み合わせ、堆積年代、地質構造に基づいて、大間々コンプレックス・葛生コンプレックス・黒保根-桐生コンプレックスの3つのコンプレックスに区分した。また、石賀(1983)の丹波帯における付加コンプレックスの区分に準じ、黒保根-桐生コンプレックスをI型、大間々コンプレックスをII型にそれぞれ対比した。

海洋プレート層序中には顕生代における最大規模の生物の大量絶滅事件が起こったとされるペルム紀/三畳紀(P/T)境界付近の地層が保存されていることが指摘された(例えば、石賀・山北, 1993)。また、この海底プレート層序中のプレート層序中のP/T境界ならびに下部三畳系には珪質粘土岩が含まれる事が知られている。これらの珪質粘土岩は古くから京都府鳴滝周辺で砥石として採掘されていることからToishi-type shaleと命名され(Imoto, 1984)、一般的に「砥石層」と呼ばれている。また、美濃-丹波帯における研究からP/T境界付近の層序モデルが示された(山下ほか, 1991)。しかし、このシーケンス中に含まれるチャートと珪質粘土岩(砥石)の物性が異なる為に、珪質粘土岩層がデコルマ面となり付加体形成時に切れてしまい、連続層序が保存されにくい(中江1993, Ogawa1993)。

これまで、三畳系の「砥石」に関しては小池(1979)によりコノドント化石のNeospathodus homeriの産出から中部三畳系の上部Spathian下部から中部三畳系の下部Anisian下部とされてきた。群馬県桐生市および黒保根村周辺地域の砥石は元木(2004)によって岩相層序学的、年代学的検討が行われ、産出したコノドント化石からSpathianである事が示された。

発表者は足尾山地南部地域の黒保根-桐生コンプレックス・大間々コンプレックスの北方地域である梅田湖周辺地域の調査を行っている。本セミナーでは研究地域に見られる砥石型珪質粘土岩に注目して研究地域の地質構造を検討する。

本日をもって一学期の水曜セミナーは終わりです。次回の予定が決まり次第改めて連絡します。

連絡先 齋藤 陽介 (岩石学 D1)  
yohsuke-saitoh@geol.tsukuba.ac.jp  
池端 慶 (岩石学)  
ikkei@geol.tsukuba.ac.jp